

「信じやすい」モンテーニュ…？

『エッセー』における世界地誌的知識

志々見 剛

『エッセー』の熱心な読者だったパスカルは、モンテーニュについて毀誉相半ばする判断を残しているが、『パンセ』の断章の一つでは、彼の「欠陥」を難じて次のように言っている。

モンテーニュの欠陥は大きい。 […] 信じやすい——「目のない人々」。無知——「円の求積法、もっと大きな世界」。 […] ¹

このうち無知についてはモンテーニュ自身が率先して認めることであろうが²、「信じやすい *crédule*」という点はどうだろうか。初めに言っておけば、「目のない人間」の存在を妄信したごとく言うのには、そもそもパスカルの誤解がある。というのも、「レーモン・スポン弁護」の章 (II, 12) の当該箇所は以下の通りだからである。

この世界には、ただ距離が離れるだけで無限の差異と多様性がある。麦もワインも我々の知るいくらかの動物も、我々の父たちが発見した世界の新しい一角には見られない。そこでは一切が異なる。そして過去には世界のどれほどの部分がバックス [=酒] もケレス [=穀物] も知らずにいたことか。プリニウスとヘロドトスを信じるなら、ある地方には我々と似ても似つかぬ種族の人間がいる。人と獣の混ざった曖昧な形体のものもいる。人々が頭なしに生まれ、目と口を胸に持つ国がある。皆が両性具有の国がある。人々が四足で歩く国がある。人々が目を額に一つだけ持ち、頭が我々のものより犬のものに似ている国がある。人々の下半身が魚で、水中で暮らす国がある。女性が五年間妊娠し、八年しか生きられない国がある。人々の頭と額の皮膚が極めて固く、鉄すら傷つけられずに撓んでしまうような国がある。人々が髭を持たない国がある。火の使用を知らない民族がいる。黒い精液を出す民族がいる。自然と狼や馬に、そして再び人間に変身する人々について何と云えばよいだろう。そして、もしプルタルコスが言うようにインドのある地方には口のない人々がいて、ある種

¹ パスカル、『パンセ』、塩川徹也訳、岩波文庫、中巻、2015、pp. 378-379、断章 680 (Lafuma 680 ; Sellier 559 ; Brunschvicg 63)。中略部ではモンテーニュの「放埒な言葉」が、後略部では彼の不敬度や死に対する異教的な態度が批判される。

² 例えば「子供の教育について」の章 (I, 26) の冒頭を参照。

の香りを嗅いで身を養っているとしたら、人間に関するどれほどの描写が誤りとなるだろう？ 人間はもはや笑いうるものでも、おそらくは理性を有し社会を作るものでもない³。

目のない人間か頭のない人間かという取り違え自体はさしたる問題でない。より重要なのは、モンテーニュがこれをプリニウス（VII, 23）に拠り、しかも、ジャン・セアールも強調する通り⁴、「……を信じるなら *qui voudra croire*」と条件を設けていることである。引用部全体を通じて、彼は古典作家の権威を藉りるものの、内容の真実性を自らの名で積極的に肯定しはしない。この態度は、キリスト教的な文脈においても決して大胆なものではない。例えばアウグスティヌスも、プリニウスの伝えるような怪物的な種族が存在する可能性を完全には否定しないのである⁵。そもそも「レーモン・スボン弁護」の章全体の文脈からしても、モンテーニュの意図が、人間の間に見られる「無限の差異と多様性」の中に我々とはまったく異質なあり方がありうることを示し、それを通じて我々が人間について抱く固定観念を揺さぶることにあるのは明らかである。

しかし、この方略が奏功するためには、例えば「頭のない人間」に関する証言が、いかに奇怪であろうとも、少なくともいくばくかの信憑性を有するものとして受け入れられる必要がある。ここに、一体どんな証言にどこまで信を置きうるか、どこにその判断基準があるか、という問題が現れる⁶。これは本来は歴史記述に関わる問題だが⁷、それに接続するものとしての自然史や

³ *Les Essais*, éd. Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, Gallimard, 2007, pp. 554-555（強調引用者）。『エッセー』の引用はこの版を用いるが、第一巻でヴィレー＝ソーニエ版と章がずれている場合はその章番号を併記する。『エッセー』のテキストの執筆年代については、同版の註を参照する。

⁴ Jean Céard, *La Nature et les prodiges*, 2^e éd., Droz, 1996, p. 395. 16世紀における怪物的人種の扱いは Id., « Y a-t-il des races d'hommes monstrueux ? » in *L'Unité du genre humain : race et histoire à la Renaissance*, Cahiers V.-L. Saulnier, 31^e, 2014, pp. 141-154 を参照。

⁵ 『神の国』（XVI, 8）では、プリニウスの挙げる諸種族を検討した後、「いくつかの種族についてこのように記されている事柄は、まったく真実でないか、あるいはもし真実ならば、彼らは人間でないか、あるいはもし人間であるなら、彼らはアダムの子孫である」と結論づける。なお、アウグスティヌスの真作と信じられていた『砂漠の隠遁者たちに宛てた説教 *Sermones ad Fratres in Eremito*』（XXXVII）は、彼が「頭を持たず、大きな目が胸についている多くの男女」を自分で目撃したと伝える。

⁶ 本稿では取り上げないが、証言と信憑をめぐる問題はまた、「見ないで信ずる者は幸いである」（ヨハネ、20：29）という福音書の言葉以来、信仰の問題と不即不離である。

⁷ 拙論 *Les Réflexions sur l'histoire dans les Essais de Montaigne*, thèse de doctorat, sous la direction de Catherine Magnien-Simonin, Université Michel de Montaigne Bordeaux III,

世界地誌⁸、旅行記の類に至るまで、時間的・空間的に離れた事柄について第三者が伝える証言を扱う場合には同じように関係する。特に同時代の著作に関しては、古典作家のような権威を持たぬばかりか、しばしばそれと衝突しさえするので、一層深刻である。

本論考では、『エッセー』において世界地誌的な知識がどのように捉えられ、用いられているかを考える。特に新大陸——上の引用で言う「我々の父たちが発見した世界の新しい一角」——に関する事柄を主な対象とするが、これは新大陸やその住民たちについての表象や評価よりも、むしろモンテーニュがそれらについての知識のあり方自体を問うものである⁹。初めに新大陸が重要なテーマとなるいくつかの章について、彼が媒介の程度や形態もさまざまな諸々の証言や知識をいかに取り扱っているかを検討する。その上で、より一般的な見地から、不確実さを免れ得ないそれらの知識が、何のために、そしてどのようにして、人間の経験的な知識の重要な一部として受け入れられていくのかを明らかにしたい。

『エッセー』における新大陸：間接的な知識のあり方

モンテーニュは無論、自分で新大陸に足を踏み入れたことはない。彼の知識の大部分は間接的な証言に依存するものであり、この点は実際に現地を知るアンドレ・テヴェ¹⁰やジャン・ド・レリ¹¹と同日の談ではない。彼らにおい

2013, pp. 83-181 を参照。

⁸ 実際、歴史と世界地誌はしばしば相互補完的なものとされた。例えばガルガンチュアのパンタグリュエル宛の手紙：「歴史はすべてを記憶に留めるように。世界地誌は大いにその助けとなろう」（Rabelais, *Pantagruel in Œuvres complètes*, éd. Mireille Huchon, Gallimard, 1994, p. 244）。ジャン・ボダン『歴史の方法』：「世界地誌は歴史と極めて近縁であり、互いが互いの一部であるようにさえ見える」（Jean Bodin, *Méthode de l'histoire in Œuvres philosophiques de Jean Bodin*, éd. Pierre Mesnard, PUF, 1951, p. 118 a）。

⁹ 『エッセー』における新大陸や食人種のテーマについては既に多くの研究がある。Frank Lestringant, *Le Brésil de Montaigne : le nouveau monde des « Essais » (1580-1592)*, Chandeigne, 2005 ならびに Dominique de Courcelles, « Nouveau Monde » in *Dictionnaire de Michel de Montaigne*, Philippe Desan (dir.), Honoré Champion, nouvelle éd., 2007, pp. 827-829 の書誌を参照。

¹⁰ テヴェは自ら見聞したと称する異国の事柄を語る上でしばしばヘロドトスやプリニウス、ストラボン、プトレマイオス等を援用するが、その一方で、「古代人たちは経験でなく推測によって語っているゆえ、やむをえぬことだが、完全に信を置けるものではない」とも言う（André Thévet, *Les Singularitez de la France antarctique autrement nommée Amerique*, Paris, Les héritiers de Maurice de la Porte, 1558, f. 36 v^o）。彼は、自分の目で見える事を最も確実な知識の基盤と見做す。例えばエトナ山の噴火

ては、著者自身の経験、特に自分の目で見た経験が事柄の真実性を確証し、古典の権威とてもそれに譲るべきものとされる。レリを初めとする主に改革派の作家たちの多くはデヴェに批判的で、その記述の信憑性に疑義を呈しているが¹²、世界地誌や旅行記というジャンルに即して見れば、一般の通念と衝突しうる事象について語る際、自分で見たという特権的立場を強調するのは、デヴェにもその批判者たちにも共通している。

では、モンテーニュは新大陸に関する知識をいかに蒐集し、その確度をどう判断し、どのように『エッセ』の中で用いているのか。ここでは1580年版の「食人種について」の章（I, 30/31）、次いで「習慣について、あるいは受け入れられた法を容易に変えないこと」の章（I, 22/23）の1588年版およびそれ以降の加筆、そして第三巻の「馬車について」の章（III, 6）を中心に検討したい。

について、「自分で見て丹念に観察したと断言する」ストラボンを引き、次のように結論する。「これはそういう事柄がありうると私を信じさせるが、それは何よりも、語った人々を尊重してのことだ。さらに、これらは我々からあまり離れた場所にはないので、我々は、最も忠実な証人である自分の目によって歴史書の記述を確認することもできる」（*Ibid.*, f. 27^{r-v}；強調引用者）。但し、デヴェのこの著作、とりわけ古典作家への言及は、その多くをゴースト・ライターであったマチュラン・エレによる。

¹¹ レリは『ブラジル紀行』で、「私は見た」「私がいた」「私の身に生じた」等の表現の頻用を正当化すべく、「これこそ私の主題の材料であるだけでなく、いわゆる熟知していること、即ち目撃し経験したこととして語られる事柄である。しかも私は、私以前には誰の指摘も、ましてや記録もないことを語るだろう」と言う。その上で彼は、「単純に語られた真実を、美辞麗句で粉飾された嘘よりも愛する人々」のため、自分の記述の真正さと新奇さを請け合う（Jean de Léry, *Histoire d'un voyage fait en la terre du Brésil*, éd. Frank Lestringant, Le Livre de poche, 1994, pp. 98-99）。ただ、レリは同時に、自分の経験が同じ経験を持たない者をどこまで説得しうるかにについては悲観的である。かつてサンセールの籠城戦の記録を著した時、飢餓の描写があまりに悲惨で人々の信を得られなかったことを承けて、彼は次のように言う。「これらの人々は、なお存命の五百人以上の人が見て知っており、フランスのど真ん中で起こった事柄について信じないというのだ。ならばどうして彼らが信じるだろうか。彼らの住む国から二千里近くも離れた場所ではしか見られぬばかりか、極めて驚くべき事柄、かつて知られず、古人の記録もないので経験のみがそれを見た者の脳裏にかろうじて刻み付けうるような事柄について」（*Ibid.*, p. 95）。

¹² Frank Lestringant, *Le Huguenot et le sauvage*, Droz, 2004, p. 147 sq. 参照。『ブラジル紀行』の序文はデヴェへの批判で満ちている。例えば以下の通り。「私は彼を、単に世界地誌家とはではなく、極めて全体的かつ普遍的な世界地誌家と呼ばせて頂こう。彼は、この世界という丸い機械には特筆すべきものが何もないと思ってか（とはいえこれについてもあることないことを書いているが）、挙句の果てには月の王国にまで戯言を探しに行つて、著書をコウノトリの話でいっぱいにしてののだ」（*Histoire d'un voyage fait en la terre du Brésil*, éd. citée, p. 77）。

「食人種について」

「食人種について」の章は、単に新大陸の住人たちを題材とするだけでなく、それと並行して、「レーモン・スボン弁護」の章と同様に「知識の発生と言明に関する諸条件の検討¹³」（レストランガン）を行うものである。実際、この章でのモンテーニュは、自分の得た証言や知識の来歴や信憑性について繰り返し考察している。

新大陸に渡ることこそなかったといえ、彼は直接的な知識の獲得を非常に重んじ、機会さえあれば自分で新大陸の文物を賞玩している。例えば新大陸で食べられるパン状の食物を「試してみたものの、味は甘いが少々味気なかった」と言うし、家には「彼らの寝床や綱や剣、戦争の時に手首を守るための木の腕輪、踊りの時に拍子を取るための一端が開いた大きな杖の見本」を所蔵しているという¹⁴。さらには彼らの詩の断片も知っている¹⁵。これに加えて、「野蛮人たち」がフランスに連れてこられて幼いシャルル九世に拝謁した際¹⁶、彼は通訳を介して「そのうちの一人とかなり長く話した¹⁷」という。この聴取は必ずしも円滑に運ばなかったと言い、また野蛮人の口を借りてフランス社会を批判しようという底意も見えて取れるが、それでもこの挿話は、できる限り生に近い情報を得ようとする彼の態度を如実に示すものである。

実際のところ、モンテーニュはテヴェやレリ（および彼らの著書の挿絵類）に多くを負い、新大陸の住民の風習に関する描写のほとんども彼の独創とは言えない¹⁸。ただ、それにもかかわらず、彼は自分の参照した書物については口を噤む一方、可能な限り直接的な証言や知識を得ようと試みる自発的かつ批判的な態度を強調する。彼が最大の情報源として挙げるのは、家で使っていた新大陸帰りの下男である。「十年か十二年ほど、我々の時代に発見されたあの新大陸の、ヴィルガニオンが上陸して南極フランスと命名した場所に住んでいた¹⁹」というこの男について、彼は次のように述べる。

¹³ Frank Lestringant, *Le Huguenot et le sauvage*, op. cit., p. 223.

¹⁴ *Les Essais*, éd. citée, p. 214.

¹⁵ 捕虜が歌う歌 (*Ibid.*, p. 219) はテヴェに依拠すると思われるが、「恋の歌」 (*Ibid.*, p. 220) はおそらくモンテーニュが何らかの経路で個人的に知ったものである。

¹⁶ 第一次宗教戦争でのルーアン包囲 (1562 年 9-10 月) の際の出来事とされるが、1565 年 4 月に王がボルドーに入市した際の出来事という推測もある (Alexandrino de Souza Filho, « Des coches sur fond d'histoire », *Des signes au sens : lecture du livre III des Essais*, éd. Françoise Argod-Dutard, Honoré Champion, 2003, pp. 53-60) 。

¹⁷ *Les Essais*, éd. citée, p. 221.

¹⁸ *Le Huguenot et le sauvage*, op. cit., p. 210 et p. 212.

¹⁹ *Les Essais*, éd. citée, p. 208.

私の許にいたこの男は単純粗野な男だった。これは真正な証言を伝えるのに適した条件である。なぜなら、賢い人々はより入念により多くのことに気付くだろうが、それに註釈をつける。そして、自分たちの解釈を引き立たせ、それを人に説得するため、いくらか話 (Histoire) をねじ曲げずにはいない。彼らは純粹な物事を決して示さない。自分が見た面に従って、それを歪めたり隠したりする。そして自分の判断に信用を与え、人をそれに惹きつけるため、素材にあれこれ付け加え、引き延ばしたり膨らませたりする。必要なのはとても忠実か、あるいはとても単純な人で、物を拵えたり偽りの考えに真実らしさを与えない人である。そこに何も付着しない人である。私の下男はそうした男だった。その上、彼は私を何度も、この旅行中に知り合った水夫や商人たちに引き合わせてくれた。だから、私はこの究明 (information) で満足し、世界地誌家たちに当たろうなどとは思ひもしなかった²⁰。

こうした評価は、モンテーニュが「書物について」の章 (II, 10) で言う「単純な歴史家」に対するものと並行する。このような歴史家は自分が受け取ったままの生の証言を作為も選択もなしに「裸で形を与えられていない歴史の素材」として提示するものとされ、内容の真偽も含めて、読者がそれを各々自分の判断力によって検討し利用するのだとされる²¹。これに対し、思慮も経験も欠きながら素材に勝手な選択と判断を加え、歴史を潤色し、歪曲し、隠蔽する歴史家は、「すべてを台無しにする」ものと批判されている²²。上の引用部でもモンテーニュは、自分の経験をそのまま語る「忠実さ」や「単純さ」を「真正な証言」の条件として挙げる一方、自分が直接知らないことを語る「世界地誌家」を批判する。この引用に続く一節でも彼は、パレスティナを見たことを口実に世界のあらゆる場所について口を出そうとする「地理学者 *geographe*」—— かなり露骨にテヴェを指す —— を批判し、自分の経験の限界を弁えた「特定の土地について語る者 *topographe*」を称揚する²³。これに加えてモンテーニュは、「賢い人々」が行う修辞学的な操作を批判の俎上に上げる。題材を取捨選択し、「説得」のために話を潤色し、「自分の判断に信用を与え、人をそれに惹きつけ」、何らかの「真実らしさ」を与える

²⁰ *Ibid.*, pp. 210-211.

²¹ 「単純な歴史家とは、自分の物を何も混ぜないもので、自分の注意に入った物をすべて蒐集し、すべての物事を誠実に取捨選択なしに記録する注意深さと熱心を持ち込むだけなので、真実を知るための判断を全部我々に委ねている。[...] それは裸で形を与えられていない歴史の素材である。各々はそこから自分の持つ判断力に応じて自分の利益を汲むことができる」 (*Ibid.*, p. 438)。

²² *Ibid.*

²³ *Ibid.*, p. 211.

といったことは、必ずしも不誠実な歪曲を意味するのではなく、ただ修辞学の規則を果たすものに過ぎないが、彼はこれを真実を毀損する要因として指弾するのである。

その上でモンテーニュは、下男を紹介してくれた「水夫や商人たち」への聴取をも含めた彼自身による「究明」の重要性を殊更に強調する。「書物について」の章では、歴史を読む際に「裁判の究明のようなやり方で *à la mode d'une information judiciaire*」複数の証言を比較検討しながら「真実の探求」を行う必要があるとしていた²⁴。「食人種について」の章でも、下男を含む「私の証人たち²⁵」の証言は、それ自体として真実と見做されるわけではなく、モンテーニュ自身が虚心に吟味することが必要だとされる。章の冒頭で「俗説に囚われないよう用心し」、「大衆の声によってではなく、理性の道によって判断しなければならない²⁶」と述べていたように、特に新大陸や食人種のように「我々」との異質性が顕著な事柄に関しては、習慣や偏見に毒されずに自他のあり方を普遍的な理性に従って公正に判断することが重要となる²⁷。かくしてモンテーニュは、食人種たちを野蛮と見下しがちな「我々」の傾向を批判して、「理性の規則によって彼らを野蛮と呼ぶことはできるとしても、それは我々と比べてではない。我々の方があらゆる野蛮さにおいて立ち優っている²⁸」と述べる。そして「我々」の側の野蛮さの証左として、「我々が単に本で読んだだけでなく、目で見てまざまざと記憶しているように²⁹」といって、自分の実見した宗教戦争の悲惨な光景を挙げる。ここでは、あくまで余談としてではあるが、彼自身についても直接的な経験を重視する姿勢を適用しているのである。

このように、1580年の「食人種について」の章において、モンテーニュは直接的で未加工の証言や知識を重んじ、それを自らの判断力で「究明」しよ

²⁴ *Ibid.*, p. 439.

²⁵ *Ibid.*, p. 213.

²⁶ *Ibid.*, p. 208.

²⁷ 「レーモン・スポン弁護」でも、新大陸の住民たちを無智や野蛮と即断する「我々」の自己中心性を批判する。「海を渡って遠い国から来た人たちは私はかつて見たことがある。我々は彼らの言葉を理解できず、その上、彼らの振舞いや容貌や衣服も我々のものと全く異なっていたから、我々の誰一人として彼らを未開で野蛮だと思えない者はなかった。彼らが寡黙でフランス語を知らず、我々のする手への接吻やくねくねしたお辞儀を知らないのを、愚昧さのゆえと見做さない者はなかった。我々の行儀作法こそが、人類が間違いなく範とすべきものだと考えていたのである」(*Ibid.*, pp. 490-491)。

²⁸ *Ibid.*, p. 216.

²⁹ *Ibid.*

うとする姿勢を強調している。こうして彼は自らの判断力を、「俗説」を離れ「理性」に適ったものたらしめようとしたのだった。ところが、1588年以降、同じように新大陸やその住民を扱いながらも、彼の姿勢には変化が生じることになる。

「習慣について」の1588年版とそれ以降の加筆

「習慣について」の章の前半部は、習慣がいかに「第二の天性」として我々の価値判断を束縛しているかを暴露するという、「食人種について」の章とも重なるテーマを扱う。モンテーニュ曰く、習慣は人間の肉体を特別な仕方に馴致するばかりか、精神のあり方をも規定し、どんな奇怪な考えでも自然のことで錯覚させてしまう。それゆえ1588年の加筆部で言うように、「人間の想像に生じるどんな気違いじみた考えでも、どこかで公然と通用している事例を見出せないような、従って我々の理性が支持し、根拠を与えることのないようなものはない³⁰」のである。1588年以降の加筆ではさらに進んで次のように言う。

習慣は我々の判断力の目を眠らせる。野蛮人たちは、我々が彼らにとって驚異である以上に、我々にとって驚異であるわけではないし、そう考える理由もない。もし各人が、この遠国の事例を涉猟した後で自分自身のことに立ち返り、健全にそれらを評価しうらば、皆これを認めるだろう。人間の理性は、我々の考えや風俗のすべてに、それらがどんな形を取っていても、ほぼ同じ重さで染み込んでいる染料である。その素材は無限で、多様さも無限である³¹。

これは、「理性の道」に従って自他のあり方を公正に判断するよう慫慂していた「食人種について」の章と大いに径庭がある。ここにおいて「理性」はどんな考えにも適当な根拠を拵えてしまうほどに無定見で融通無碍なものとされ、我々の先入見をむしろ補強するものとなる。これを脱して「健全に」判断を下すためには、自分にとって異質な「遠国の事例」に触れ、翻って自分自身のあり方を省みることが一つの有効な方策となる。有無を言わせぬ経験的知識を受け入れることで、習慣およびそれと野合した理性によって曇らされた我々の判断力を揺り動かそうというのである。

こうした観点からモンテーニュは「我々」には奇怪に映るであろう異国の風習をめくるめくほどに列挙する。1580年の段階ではヘロドトスやプルタル

³⁰ *Ibid.*, p. 114.

³¹ *Ibid.*, p. 115.

コスに従いながら古代の東方やスパルタの例を二、三挙げるに過ぎないが³²、1588年以降、ロペス・デ・ゴマラの『西インド誌』を主要な典拠として新大陸の諸民族に関する多数の例が付け加えられ、その数は以降の加筆でさらに膨れ上がる³³。挨拶の時に相手に背を向ける国、王様の吐く痰を寵姫が手で受け止める国、貴族たちが王様の汚物を布に拾い集める国、という所から始まって、性や婚姻や出産や相続、服飾や食事、信仰や儀礼、髪や爪や体毛の手入れに関わることまで、多種多様の例が数ページにわたって並べられる³⁴。

興味深いのはその提示の仕方である。モンテーニュは *Où* に従う簡潔な節によって「……という国がある」という記述を積み重ねるが、典拠はおろか、具体的な地域や民族の名も一切示さず、本来ならば存在するはずの地理的・時間的・社会的な差異を完全に捨象している。1580年版にあった古代の事例も含め、個々の特殊性ではなく全体としての多様性を強調するのである³⁵。それらはいずれも書物を介した知識であるはずだが、自明の経験的事実であるかのごとく語られ、証言者の質や信憑性を詮索することはない。ここでのモンテーニュは、「食人種について」の章でのような、生の証言を自らの判断力で「究明」しようとする姿勢をもはや取らない。理性すらもが習慣の桎梏を免れないとされた以上、我々の先入見を乗り越えるためには、自分の理解の外に存する出来事を、真偽の厳密な確証は保留して、「事例 *exemples*」として受け入れることである。これは、クインティリアヌスの定義にあるように、大前提として「起こったことか、起こったとされること」と見做される³⁶。モンテーニュはこれを通じて自分の、さらには「我々」全体の判断力が陥る偏狭さを暴露しようと試みる。一見して奇妙であればあるほど、一層

³² *Ibid.*, p. 118.

³³ ヴィレーに従えば、モンテーニュは1588年版を準備している時期にゴマラをマルタン・フュメの仏訳（増補第五版、1584）で読んだ（Pierre Villey, *Les Livres d'histoire moderne utilisés par Montaigne*, Hachette, 1908, pp. 76-96）。元々スペイン語で書かれてカル五世に献呈されたこの著作は、時に一部の人間の行き過ぎを批判しつつも、概してスペインの征服者たちに好意的である。なお、ゴマラ自身は新大陸に渡ったことはない。

³⁴ *Les Essais*, éd. citée, pp. 114-118.

³⁵ Frédéric Tinguely, « Relativisme et conscience de l'unité du genre humain », in *L'Unité du genre humain*, op. cit., p. 31.

³⁶ Quint., V, 11, 5. *Exemplum* は技術的な立証の一つで弁論の外部から持ち込まれるものとし、「起こったことか、起こったとされることで、我々の意図を説得するのに有用なもの」とされる。また、これは聴衆の知識や弁論上の必要に応じて、長くも短くもすることができる（V, 11, 16）。

効果的である。1588 年以降の加筆で言うように、偏見を離れて見れば、「これらの異国の事例は、奇怪なものではない³⁷⁾」はずなのだ。

同じような新大陸に関する「事例」の列挙は、「レーモン・スボン弁護」の章の、やはり 1588 年版の加筆にも見られる。モンテーニュはここで、新大陸と「我々」の習俗の間の奇妙な符合を指摘する。

エピクロスは、物事は今ここで我々が見ているようにあるのと同様に、全く似通った同じようなものが、他の複数の世界でもあると言う。彼はこれをもっと確乎として言えただろう、もしも彼が西インドと言われる新しい世界と、現在や過去の我々の世界とがこれほど奇怪な事例 (*estranges exemples*) において類似し一致しているのを見たのだったら³⁸⁾。

エピクロスの説く多数世界の存在については、これ以降も新大陸、あるいは世界地誌全体を論じる上で、しばしば現れる³⁹⁾。モンテーニュはこの引用部に続いて、ゴマラに拠りながら、宗教的な儀礼やその他の習慣に関わる新大陸の様々な事例を、「習慣について」の章と同じように列挙する。割礼、女性だけの国家、断食、不犯戒、十字架と枚挙に遑がない⁴⁰⁾。無論、「レーモン・スボン弁護」の章の文脈では、「これらの事例のいくつかに見られる我々の宗教の空しい影は、その尊厳と神性を証立てている⁴¹⁾」として、「野蛮人たち」にも我々と同様に「共通で超自然的な靈感⁴²⁾」が見られることを結論づけようとする点、「習慣について」の章が彼我の差異を強調していたのとは異なる。だが、こと新大陸に関する知識のあり方という点においては、「西インド」とおおまかな場所は示すものの典拠を明示せず、また真偽についての「究明」に立ち入らずに一見奇妙に見える「事例」を列挙する点、二つの章は軌を一にしているのである。

³⁷⁾ *Les Essais*, éd. citée, p. 111.

³⁸⁾ *Ibid.*, pp. 607-608.

³⁹⁾ 同じ「レーモン・スボン弁護」の章には、人間の理性を超越した神の全能に鑑みて、我々の世界とは異なる法則や構造を持つ他の複数の世界の存在可能性を認めることが、「お前の理性にとって最も真実らしさと根拠を有することだ」とある (*Ibid.*, p. 553)。

⁴⁰⁾ *Ibid.*, pp. 608-610.

⁴¹⁾ *Ibid.*, p. 609.

⁴²⁾ *Ibid.*, pp. 609-610.

「馬車について」

第三巻の「馬車について」の章で新大陸をめぐるテーマを再び正面から取り上げるに当たり、モンテーニュはそこでの知識のあり方を改めて問い直すことになる。とはいえ、この章は「食人種について」の章とは相当趣が異なる。幸福な黄金時代を髣髴させる原初に近いブラジルを扱うか、悲惨な破局へと向かう文明的なペルーやメキシコを扱うか、といった題材の相違だけではない⁴³。この章でのモンテーニュは、彼が「私の著者⁴⁴」と呼ぶゴマラを主な典拠としながら⁴⁵、新大陸を、風俗・風習の差異こそあれ、古代や現代の「我々」の世界と同じ人間の歴史に属するものと捉えるようになる。それゆえ、ゴマラの『西インド誌』や『コルテス征服記』に拠ることは、古代ローマの豪奢さを語る際にペトルス・クリニトゥスの『高潔な学芸について⁴⁶』やユスティウス・リプシウスの『円形劇場について⁴⁷』を借用するのと何ら異ならないことになる。

この章の後半部で、モンテーニュは具体的な挿話を挙げて、侵略者たるスペイン人たちの姦計や食欲や残虐非道に対して、新大陸の住民たち、特にペルーやメキシコの王たちが毅然たる態度を示した様子を述べる。ゴマラの記述に基づきながらも、彼はそれを自在に伸縮する。例えばスペインの侵略者の脅迫に反駁する野蛮人の見事な弁論である。ゴマラが間接話法を用いて学士エンリーコと原住民とのやり取りを記し、最後には抵抗も空しく一方的な虐殺が行われたと伝えるのに対し、モンテーニュは自由間接話法を用いて原住民の一气呵成の弁論を仕立て上げ、またそれが奏功しなかったという結末にも言及しない⁴⁸。同様に、ペルーやメキシコの王たちの死に際を描写する際

⁴³ ナカンが二つの章の差異を強調するのに対し（Géralde Nakam, *Les Essais de Montaigne, miroir et procès de leur temps*, Nizet, 1984, pp. 329-351）、レストランガンはむしろ類似点を指摘し、特にブラジル原住民のイメージがメキシコ、ペルーも含む新大陸全体に投影される当時の傾向がここでも見られるとする（Frank Lestringant, « L'Amérique des « Coches », fille du Brésil des « Cannibales » : Montaigne à la rencontre de deux traditions historiques », *Montaigne et l'histoire : actes du colloque international à Bordeaux, 29 septembre-1^{er} octobre 1988*, Claude-Gilbert Dubois (dir.), Klincksieck, 1991, pp. 143-160）。

⁴⁴ *Les Essais*, éd. citée, p. 959.

⁴⁵ 僅かな例外として、「私の食人種たちが示す通りである」（*Ibid.*, p. 956）と、「食人種について」の章で言及していた自分の経験を喚起することがあるだけである。

⁴⁶ マルクス・アントニウス、ヘリオガバルス、フィルムスの用いた奇抜な車駕（*Ibid.*, p. 945, n. 3）；プロプスが闘技場で催した素晴らしい見世物（*Ibid.*, p. 949, n. 5）。

⁴⁷ 円形劇場についての描写に加えて、中間に引用されるローマの詩人たちの詩句まで、すべてリプシウスのこの著作に拠る（*Ibid.*, pp. 949-951 ; voir p. 949, n. 6）。

⁴⁸ Francisco Lopez de Gomara, *Histoire générale des Indes occidentales et terres neuves, qui*

にも、征服者たちの卑劣と暴虐に対して彼らの剛毅で沈着な態度を浮き上がらせるべく、ゴマラの記述を再構成している⁴⁹。固有名詞は最小限に留められ——王たちの名もピサロやコルテスの名も登場しない——、スペイン人たちの間での見解や立場の相違も省かれ⁵⁰、征服者たちと新大陸の住民の対決をより劇的なものにしていく。

「習慣について」の章よりも詳細で挿話的ではあるが、モンテーニュはこれらをやはりクインティリアヌスが定義するような意味での「事例」として用いている。すなわち、これらは時代や場所を同定可能な出来事として『エッセー』の外部に根拠を持つゆえ、それ以上には真偽を吟味しなくてもよいのであり、かつ主題の要請に応じて自由に伸縮しうるのである。

とはいえ、モンテーニュは、ゴマラの記述を公正無私なものとして闇雲に受け入れるわけではない⁵¹。彼は、スペイン人たちが捕虜を生きたまま火炙りにしたことについて、「我々はこの叙述を彼ら自身から聞いた。というのも、彼らは単にそれを認めるだけでなく、自慢し吹聴しているからである⁵²」と述べる。ここでは、ゴマラの新スペイン的な偏向を念頭に、その記述をスペイン人征服者たちの批判へと転用しているのである。その上でモンテーニュは、カスティリアの王が彼らの残酷さを忌んで多くを処刑し、また神意によって、略奪品の多くは運搬中に海に沈み、征服者たちは内紛を起こして「互いに食い合う」ようになったと述べる⁵³。後日譚に当たるこの記述は完全にゴマラから離れ、おそらくベンゾーニに依拠する⁵⁴。「食人種について」の章でのような証言の「究明」を留保する反面、モンテーニュはあくまで、「事例」の選択と利用に関しては自分の自由を堅持するのである。

jusqu'à present ont esté decouvertes, trad. Martin Fumée, 5^e éd., Michel Sonnius, 1584, ff. 234 v^o-235 v^o; *Les Essais*, éd. citée, pp. 955-956.

⁴⁹ インカ皇帝アタワルパの死 (*Histoire générale des Indes occidentales*, éd. citée, f. 320 r^o-v^o)、メキシコ王クアウテモックの死 (*Voyages et conquestes du capitaine Ferdinand Courtois, és Indes occidentales*, trad. Guillaume Le Breton, Abel L'Angelier, 1588, ff. 326 v^o-328 r^o)。

⁵⁰ 例えば風聞を元にしたアタワルパの処刑には多くの異議があったし、フリアン・アルデレットが主導したクアウテモックの拷問にコルテスは反対していた。

⁵¹ 『西インド誌』最終章「スペイン人礼賛」に顕著だが、ゴマラはスペイン人が新大陸に改宗と文明化を齎したと称え、また教皇の裁定に基づくスペインの領有権も認める。その上で、野心や物欲に駆られたいくらかの例外的な逸脱に関しては、神が悲惨な最期を与えたとする (*Histoire générale des Indes occidentales*, éd. citée, f. 485 v^o)。

⁵² *Les Essais* éd. citée, p. 958. なお、スペイン人征服者の残酷さへの告発は、ラス・カサスやベンゾーニに端を発し、ヨーロッパ中で広まっていた。

⁵³ *Ibid.*, p. 958. なお、これは新大陸を扱う章で神の介入に言及する唯一の箇所である。

⁵⁴ *Brésil de Montaigne*, op. cit., p. 156, n. 5.

以上のように、直接的な知識や証言を重んじ、自らの判断による「究明」を重視した「食人種について」の章と、他者の伝える「事例」について真偽や信憑性の問題を保留しつつ、自分の裁量でそれらを按配し利用しようとする「習慣について」の章の加筆部ならびに「馬車について」の章との間には、一つの断層がある。その要因として、一つにはゴマラやベンゾーニの通史的な著作を参照するようになったことがあろうが、もう一つには人間の知識、とりわけ他者の証言を含めた経験的知識についての捉え方がこの間に変容したということがある。以降、世界地誌に関わるテーマを念頭に置きつつ、より広い見地から、この問題を考えることにしたい。

世界地誌的な知識をめぐる

1588年以降のモンテーニュにしても、決して他者の証言を闇雲に信頼することの危険を忘れたわけではないし、時として自らの判断による「究明」を行う自由を保持している。例えば「跛について」の章では、奇蹟や魔女の存在を論じる上で、些細な原因から大きな印象が生じるといった知識の伝達上の不均衡が我々の「究明 information」を妨げるとし、「こうした探求にはとても賢明で周到で細心の調査者が求められる」と述べている⁵⁵。とはいえ、これはあくまで論争的な主題を扱う上での例外的なものであった。

では何ゆえにモンテーニュは敢えて自分の判断による「究明」を保留して他者の証言を「事例」として積極的に容れようとするようになったのだろうか。この背景には、一方では、1580年から既に、世界地誌的な知識が、例えば世界の多様性なり、経験的知識の更新可能性なりといった一般的観点から捉えられ、人間やその理性のあり方への批判のために用いられてきたということがある。他方では、1588年以降、人間の知識の狭小さや脆弱さがより深刻に考えられるようになるにつれ、他者の証言を含む経験的な知識について新しい見方が提起されるようになることがある。以下、これらの点を順に見ていきたい。

⁵⁵ *Les Essais*, éd. citée, p. 1075. モンテーニュは実際、「先入見によって判断を惑わされない人間」として、投獄されている魔女たちの「証拠や自由な告白」に触れ、むしろ狂人だろうと結論する (p. 1079)。では魔女の存在が反駁しえない経験的事実として示された場合はどうするか？ 彼の答えは以下の通りである。「確かに、経験と事実に基づいた証拠と理由なら私はそれらを解きほどこかない。その糸口もない。だが、私はそれを、アレクサンドロスが結び目をそうしたように断ち切ってしまう。結局の所、自分の推測によって一人の人間を生きたまま焼くのは、それをあまりに高く買い被ることだ」 (*Ibid.*)。

世界の広大さと多様さ：自分自身を健全に判断すること

世界地誌や歴史を通じて経験的知識として提示される世界の巨大さと多様さは、人間の陥りがちな自己中心的な判断の矯正に資するものである。モンテーニュは「子供の教育について」の章で子弟に課すべき教育を論じる一環として、異国への旅行や歴史書の読書を含む「世間との交流」の重要性を訴える。これが「人間の判断」に「驚くほどの明察」を授け、我々が陥りがちな視野の狭窄から救ってくれると述べる。例えば「私の村でブドウが霜に襲われると、司祭はそこから全人類に対する神の贖恵を論じ、食人種たちさえ渇きに苦しんでいると考える」が、このような自己中心的な判断ほど危ういものはない⁵⁶。その上でモンテーニュは次のように言う。

この大きな世界は——ある人々はこれを類概念の下にある種概念としてさらに増やそうとするが——、我々が自分を正しい角度から知るために映して見なければならない鏡である。要するに、私はこれが生徒のための書物であってほしいのだ。これほど多くの気質、学派、判断、意見、法律、習慣は、我々自身のものを健全に判断することを教え、我々の判断にはその不完全さと生来の脆弱さを教えてくれる。これは些細な学習ではない。これほど多くの国家の動乱、国勢の変転は、我々自身のものに色めき立つべきではないと教えてくれる。忘却の下に埋もれしまったこれほど多くの名前、勝利と征服は、十人ばかりの弓兵や陥落して初めて名前が分かる鳥小屋を奪取したことで我々の名前を永遠化しようとする望みを滑稽なものにする。これほど多くの異国の儀礼の高邁さや尊大さ、これほど多くの宮廷や貴族たちの壮麗さは、我々のものの絢爛さを見ても目を奪われぬよう、目を堅固にしてくれる。我々の前に死んでいったこれほど多くの人々は、立派な仲間たちに会いにあの世に行くのをそれほど恐れないようにしてくれる、等々である⁵⁷。

モンテーニュは「これほど多くの *tant de*」という表現を反復しながら、世界の時間的・空間的な広大さと多様さを強調する。世界には自分とは異なるあり方・考え方が確かに存在し、しかもそれは国や時代を跨ぐごとに無数に存在する。デモクリトスやエピクロスの説く多数世界の存在を認めるとすればなおさらである。モンテーニュは、こうした多様性と広がりを経験的に体得する上で旅行や読書が有用だとしていた。ただし重要なのは単なる知識の累加ではない。同じ章で彼は歴史書について、「歴史を教えるのではなく、それを判断することを教えるようにしてほしいものだ⁵⁸」と述べているが、

⁵⁶ *Ibid.*, p. 163.

⁵⁷ *Ibid.*, p. 164.

⁵⁸ *Ibid.*, p. 162.

上の引用部でもその延長として、彼は各人が自分の判断力によって世界を「鏡」ないしは「本」として利用するよう促している。その目的は詰まるところ、自分自身や自分の属する集団のあり方を絶対視も過大評価もしないことに帰着する。このような目的を掲げるとき、伝えられるそれぞれの事柄の真実性の吟味は後景に退くことになる。

しかし、実際のところ、世界地誌的な知識は必ずしも常に「鏡」や「本」のように静的かつ総体的に捉えうるものではない。というのも、こうした知識の特徴は様々な「発見」によって絶えず更新される、少なくとも更新されうるものだという点に存するからである。そこにおいて、不断の更新と拡大を続ける経験的知識は普遍性を標榜する理性と衝突することになる。

理性と事実の衝突

「レーモン・スポン弁護」の章で、モンテーニュは理性 (*raison*) と事実 (*effects*) がしばしば衝突すると述べる⁵⁹。幾何学では、ある直線に絶えず接近しながら決して交わらない線（漸近線）のように「経験の真実 *la vérité de l'expérience*」に反する事柄が証明されるし⁶⁰、ピュロン学派は「彼らの論拠と理性」によって「経験のもっともらしさ *l'apparence de l'expérience*」や「事実の明白さ *l'evidence des effects*」を突き崩し、突拍子もない説を立証してしまう。モンテーニュはこれを「我々の理性の柔軟さ」のゆえに可能なことだと言う⁶¹。従って、どれほど理性に適って見える説でも、それを常に真に受けるべきではない。コペルニクスの地動説やパラケルススの新しい医学論などは説得的な論拠によって旧来の説を排するが⁶²、理性の融通無碍ぶりを考えれば、これらとて来るべき第三の説によって顛覆されるやもしれないのである。

⁵⁹ *Ibid.*, p. 606. 「理性」と「経験」の関係は、「経験について」の章 (III, 13) で大きく取り上げられる。その冒頭では次のように言う。「知識欲よりも自然な欲望はない。我々はそこに至るためにあらゆる手段を試みる。理性では不足の場合には、経験を用いる。[...] これは遙かに弱く卑しい手段である。だが、真実はとても偉大なものなので、我々をそこに導いてくれるどんな手立ても蔑ろにしてはならない。理性は多くの形を持っていて、我々はどれに掴まればよいかわからない。経験もそれに劣らない」 (*Ibid.*, p. 1111)

⁶⁰ *Ibid.*, p. 606. 「我々の精神はいかに自分自身の邪魔をするか」の章 (II, 14) でも同じ例が反復される：「絶えず接近しながら決して交わらない二本の線、哲学者の石、円の求積法。これらにおいては、理性 (*raison*) と事実 (*effect*) が相反する」 (*Ibid.*, p. 649)。

⁶¹ *Ibid.*, p. 606.

⁶² *Ibid.*, p. 605.

モンテーニュはまた、風に関する自然学の新理論を説く者に対し、これまでテオフラテスの理論に従って問題なく航海してきた以上、「理性よりも事実に従いたい」と答えたと言う⁶³。こうした場合、経験的な知識は、これ自体も完全無欠ではないにせよ、パラドクサルなものであればあるほど一層効果的に、理性の「柔軟さ」を掣肘してくれる。この端的な例として、モンテーニュは世界地誌的な知識の進展による世界像の転換を挙げる。

優れた人物だったプトレマイオスは、我々の世界の境界を定めた。古代の哲学者たちはみな、自分たちの知識が及ばないかもしれないいくらかの離島を除けば、世界を計測し終えたと考えた。世界地誌の知識と一般に受け入れられていた考えとに異議を呈するとしたら、それは千年前にはピュロン風に考えることだっただろう。対蹠地を認めるのは異端だった。それが、我々の世紀には、一つの島や一つの国どころか、果てしなく大きな、我々が知っていたものと同ほぼ同じ大きさを持つ一つの大陸が発見されたばかりなのである。それでも現今の地理学者たちは、すべては見つかり、すべては知られたと断言して憚らない。

ト云ウノモ、手元ニアルモノガ素晴ラシク、役立ツヨウニ見エル。

プトレマイオスがかつてその理性に基づきながらも誤ったのだから、今私がこれらの者の言葉を信用するというのは全く愚かなことではなからうか⁶⁴。

こうした観察自体は決してモンテーニュの独創ではない。プトレマイオスら古代人の無知—— 特に対蹠地の存在について⁶⁵—— は、テヴェエをはじめ、しばしば指摘された⁶⁶。また、ネテスハイムのアグリッパは「世界の測定法

⁶³ *Ibid.*, p. 606.

⁶⁴ *Ibid.*

⁶⁵ 対蹠点の存在を否定したラクタンティウスやアウグスティヌスに対し、テヴェエやゴマラは経験の名の下にその誤りを示す (*Les Singularitez de la France antarctique*, éd. citée, pp. 391-393 ; *Histoire générale des Indes occidentales*, éd. citée, f. 8 v°)。ラ・ボブリーニエも、現在の旅行者たちが「古代のギリシャ人、ローマ人、キリスト教徒たちが想像によって精神で捉えすらできなかったものを実見によって (par preuve de l'œil) 明らかにした」と言う (Henri-Lancelot de La Popelinière, *Les Trois mondes*, éd. Anne-Marie Beaulieu, Droz, 1997, p. 87 ; Cf. Id. *Histoire des histoires*, éd. Philippe Desan, Fayard, 1989, t. II, p. 16)。

⁶⁶ テヴェエは言う。「プトレマイオスは様々な国や異国を扱ったが、とりわけアフリカとエチオピアについてはいい加減なことを述べている。古代の著者たちの誰一人として、私に真の満足を与えるほどこれについて優れた完璧な知識を持っていた者はいない。彼がブラス岬について語った時 [...]、彼の時代としては最も低緯度の世界を記述したのだが、それでも世界すべてに触れたわけではない。我々の時代によりやく発見された南の大陸の大部分を知らなかったからだ」 (*Les Singularitez de la France antarctique*, éd. citée, f. 22 v°)。

Cosmimetria⁶⁷」の技術・知識が不確実さに冒されている証左として、新大陸の「発見」がそれ以前の論をすっかり顛覆してしまったことを挙げる⁶⁸。その上で、「この技術は、巨大な陸地と探索しえない海、すべての島や地方の場所、それらの境界と特徴、そして無数の民族の知られざる起源、風習、習俗、特性について我々に教えようと努めるが、そこから我々が引き出せる利益は、ただ、他者に属する事柄を仔細に調べることで、我々が自分自身について無知であると悟ることにある⁶⁹」と説いている。

モンテーニュは、我々の知識の不確かさを強調し、自分自身に関する無知を暴露しようとする点でアグリッパと軌を一にする。その上で、経験的知識を、常に限定的で不完全ながらも、絶えず更新され修正されていくものと捉える点が特徴的である。プトレマイオスの世界像は、それが示された当時の経験的知識に基づくばかりでなく、当人の理性にも適い、かつ哲学者たちにも公衆にも受け入れられていた。だが、新大陸の発見は、まったく新しい経験的知識として、旧来の思考の枠組を無効化する。しかもこれは、「食人種について」の章の冒頭で述べていたように、プラトンやアリストテレスが説いた未知の大陸とも異なるものとされるのだ⁷⁰。そうとすれば、人間の知識の不可避免的な脆弱さに鑑みて、現代の経験的知識に安住する「現今の地理学者たち」に対しても、自分の無知を表明して判断保留に至るほうが、すなわち「ピュロン風に考える pyrrhoniser」ほうが、むしろ適切なのではないか⁷¹？引用部に続く 1588 年以降の加筆で、彼は「我々が世界と呼ぶこの大きな物体

⁶⁷ これは「地理学 *geographia*」と「世界地誌 *cosmographia*」を包含するものとされる (Henricus Cornelius Agrippa, *De incertitudine & vanitate scientiarum & artium, atque excellentia verbi dei declamatio*, Jean Pierre, 1531, f. xl r°)。

⁶⁸ 「[対蹠点を否定する人々に加えて] ヨーロッパ、アジアとアフリカの他に人が住む場所があることを否定する人々がいる。だが、これは我々の時代のポルトガル人とスペイン人の航海によって明らかになった。これらの航海は、古代の詩人たちの戯言やアリストテレスの誤った意見に反して、黄道下の全地帯に人が住んでいることを示したのだ」 (*Ibid.*, f. xl v°)。

⁶⁹ *Ibid.*

⁷⁰ *Les Essais*, éd. citée, pp. 208-210. モンテーニュは、ショーヴトンによるベンゾーニ仏訳の註釈をかなり忠実に利用している (*Brésil de Montaigne, op. cit.*, pp. 191-195)。ベンゾーニに従ってモンテーニュが言及するのは、プラトン『ティマイオス』・『クリティアス』と擬アリストテレス『異聞集』の記述である。

⁷¹ ルイ・ル・ロワなどは、世界の発見が完了したという楽観に浸る：「我々が真に言うのは、今日では世界のすべてが明らかになり、人類すべてが知られたということだ。そして今やすべての人々が互いに便宜を提供しあい、お互いの不足を補いあう。あたかも一つの同じ世界的国家に住んでいるように」 (Loys Le Roy, *De la vicissitude ou variété des choses en l'univers*, éd. Philippe Desan, Fayard, 1988, p. 418)。ラ・ポブリニエにも同様の考えがある (*L'Histoire des histoires*, éd. citée, t. II, p. 14)。

が、我々の考えているのとは全く違うものである、という方がより真実らしいのではなからうか⁷²」と述べる。世界というものが、我々がまだ知らないか、あるいは決して知りえない領域を持ちうる以上——多数世界の存在を認めればなおさらだ——、理性すらも自足的かつ普遍的な形でその全体を把握することはできない。新大陸の発見のような経験的知識の更新は、こうした理性の限界を露呈させる絶好の機会となるのである。

歴史の複線化と多層化：我々の知りえない広漠たる過去の領野

「馬車について」の章でモンテーニュは、歴史的・世界地誌的な知識のあり方を改めて問い直す。だが、ここではとりわけ、我々の元に届いた知識をどう扱うかということ以上に、我々の知らないこと、知りえないことの拡がりにいかに思いを致しうるかということの問題とする。

新大陸について語るに先立ち、モンテーニュはローマの皇帝たちの豪奢さや鷹揚さを語る。これを現在の「我々」と対比して、「その時代は我々の時代のものとは異なる精神で満ちていた⁷³」とするのである。だが、これは単なる古代の礼賛ではない。過去のローマは、人間が「前に進まず、むしろ彷徨い、あちこちと踏み惑い、逆に戻りもする⁷⁴」という無軌道な歴史の進展を閲してきた、その一局面とされる。これに驚嘆するのは、ただ「我々」の知識の狭小さゆえに過ぎないのだ。

これを踏まえて新大陸を取り上げるに当たり、モンテーニュは、「習慣について」の章のように「我々」から見た異質さや奇怪さを強調するのではなく、地理的・時間的に隔たった事柄を知る上での「我々」の知識の限界に焦点を当てる。ここでは新大陸にも、人間の歴史を構成する重要な一部として、一つの固有の歴史が想定されるようになる。「我々」が破滅に瀕している当代に、新大陸は、それとは全く無関係に幼年時代の幸福を謳歌していた⁷⁵。「我々」との接触のために破滅が促進される恐れがあるとはいえ、本来そこには「我々」とは別個の歴史的展開があったのである。とりわけ文明の進んだインカやアステカは、いくつかの点でほとんど「我々」の古典古代と比肩

⁷² *Les Essais*, éd. citée, p. 606.

⁷³ *Ibid.*, p. 951.

⁷⁴ *Ibid.*

⁷⁵ 「我々の世界は、別の世界を見つけたばかりである（これがその最後の弟なのか誰が請け合うことができよう、というのも、ダイモンたちもシビュラたちも、我々も今日まで知らずにいたのだから）。これは、我々のものと同じくらいに大きく、充実して、立派な手足を持っている。だが、あまりに新しくあまりに子供なので、未だなおABCを教わっている所だ」（*Ibid.*, pp. 952-953）。

するまでに達していたとされる。クスコとメキシコでは高度な技術と豪華な装飾を知っており、中でもペルーの街道はギリシャ、ローマ、エジプトのいかなる建造物にも勝るとされる⁷⁶。戦時・平時に示す美德においても「彼らのうちに見出せる事例を、我々のこちら側の世界で記憶に留められている最も名高い事例と比較することも私は辞さないだろう⁷⁷」とされる。彼らの亡国の悲運すらも、カエサルやアレクサンドロスを引き合いに出して語られている⁷⁸。

だが、これほどの偉大さに達したこの世界の全貌は杳として知れず、様々な偶然によってかろうじてそのごく一部を「我々」に開示したに過ぎない。ここに歴史的・世界地誌的な知識がそもそも有する脆弱さが露呈する。他の章で新インドのある民族について語る際、モンテーニュは「その名を挙げても仕方がない。彼らはもはや存在しない。名前と土地についての古い知識を完全に消し去るまでにこの征服による荒廃は広がったのだ⁷⁹」と嘆ずるが、こうした物理的な破壊が伴わないとしても、この種の知識は不断の忘却と湮滅の危険に晒されている。そのため、「馬車について」の章で言うように、「我々の知識はあらゆる方向に弱いのではないかと私は恐れる。我々は遠方も後方も見ない。それは僅かなことしか把握せず、見もしない。時間の拡がりについても内容の拡がりについても限られている⁸⁰」のである。これは単に新大陸に限ったことではない。彼が引用するホラティウスとルクレティウスの詩句が示すように、アガメムノンやトロイ戦争以前にあったであろう大事件や大人物も、そしてそれを語ったであろう詩歌も、すべて忘れ去られてしまったのである。

このような忘却と沈黙の無限にも等しい拡がりこそが、「馬車について」の章で新大陸を取り上げるための前提となる。

⁷⁶ *Ibid.*, p. 959.

⁷⁷ *Ibid.*, p. 953.

⁷⁸ カエサルについては、何も知らずに大砲の轟音を聞いたなら彼すら肝を冷やすに相違ないと言い、アレクサンドロスについては、この征服が彼や彼に比肩する古代人によってなされたなら、新大陸の住民たちにより優れた模範が与えられたであろうにと嘆く (*Ibid.*, p. 954)。なお、新大陸について論じる上で古典古代の人物や事象を参照することは「食人種について」の章でも既に見られるが、これも、アルトーグの指摘する通り、新大陸の事柄を古典古代に還元するのではなく、むしろその特異性を際立たせようとするものである (François Hartog, *Anciens, modernes, sauvages*, Galaade éditions, 2005, p. 51)。

⁷⁹ *Ibid.*, p. 706.

⁸⁰ *Ibid.*, p. 951.

過去について我々に伝えられていることの全てが真実だったとしても、そして誰かに知られていたのだとしても、それは知られていないことに比べればほとんど無に等しい。我々がそこにいる間にも流れていくこの世界の姿について、最も詮索好きの者たちの知っていることでさえ、いかに貧弱で狭小なものだろう。個別の事件は、しばしば運命が模範的で重大なものしてくれるから措くとしても、偉大な国家や民族の有様についてさえ、我々の知る百倍以上のことが知られずにいる。我々は火砲や印刷術の発明を奇蹟だと大騒ぎしたが、世界のもう一方の端、中国では他の人々が千年も前からこれらを用いていた。我々が自分の見ていないのと同じくらいにこの世界について見ているのであれば、確かに、形態の不断の増大と変化を見出すのではないか。自然にとって唯一で稀有なことは何もない。我々の知識にとってあるだけだ。これが我々の規則の惨めな根拠であり、我々に事物についてとても誤った像を示すのである⁸¹。

「我々」の世界の外にも、少なくとも新大陸と中国という各々独自の歴史的發展を有する世界がある⁸²。エピクロスの説を認めるならば、さらに多数の世界がありうる⁸³。その各々がそれぞれ固有の過去を持つとすれば、人間の歴史の総体は途方もなく膨大なものになるだろう。そこには、唯一のもの、稀有なものは何もない⁸⁴。だが、それらについて人間は何を、どれだけ知りうるのか？ 個人の経験に書物や伝聞を通じた間接的な知識を加えても、そこには歴然たる限界がある。いかに博覧強記の人間とて、自分の知らないこと、知りえなかったこと、知りうる可能性すら芽生える前に消え失せてしまったことを思えばただ慄然とするしかない。世界の多様性を静的に捉えて「鏡」として用いようとしていた「子供の教育について」の章と比べると、ここには大きな落差がある。よしや世界の広大さや多様さを体得するといっ

⁸¹ *Ibid.*, p. 952. 「栄光について」の章 (II, 16) の 1588 年以降の加筆においても、栄光を求めることの空しさを説くという全く異なる文脈ではあるが、同種の見解を述べている。「世界の半分以上の運命は、記録がないためにその場限りのものとなり、日を置かず消えていく。もし私が、それらの知られていない出来事を手に入れることができれば、あらゆる種類の事例について、知られているものを置き換えられるようなものを容易に考え付くことだろう」 (*Ibid.*, pp. 665-666)。

⁸² 中国については、「経験について」の章の 1588 年以降の加筆でも、学芸や政治において「我々」のものを凌駕していると述べる。その上で、次のように言う。「この歴史が私に教えてくれるのは、いかに世界が、古代人たちが我々が理解していたものの以上に巨大で多様なものかということだ」 (*Ibid.*, p. 1118)。なお、中国についての彼の知識は、フアン・ゴンザレス・デ・メンドーサ『シナ大王国史』の仏訳 (1588) に基づく。

⁸³ この章ではエピクロスやデモクリトスの名は現れないが、ルクレティウスや、1588 年以降の加筆部ではキケロ『神々の本性』を引いて、間接的に言及している。

⁸⁴ 「レーモン・スボン弁護」の章の一節も参照 (*Ibid.*, p. 553)。

ても、所詮はたまたま自分の手に残った断片的な知識を元に、「事物についてとても誤った像」に泥んでいるに過ぎない。これはもはや我々の態度や熱意の問題ではない。人間の知識は不可避免的に偏頗で、局限されているのである。それゆえ「過去について我々に伝えられていることの全てが真実だったとしても」という仮定は、深刻な意味を持つ。知識の伝達の過程では無論様々な誤謬や欠落が生じるが、だからといって「食人種について」の章で求めているような真実の「究明」に執するならば、我々の手元にある僅かばかりの知識をさらに貧弱にしまうだけである。

とりわけ太古の時代、さらには我々の世界以前に存在したかもしれない世界については、広漠たる不可知の領野が広がっている。1580年の「レーモン・スボン弁護」の章では、プトレマイオスの世界観の顛覆を述べた前出の引用部に続いて、アレクサンドロス、キケロ、シチリアのディオドロス、アリストテレス、プラトンという錚々たる古代人たちの名を挙げて、エジプト、カルデア、ペルシャなどが伝承や証拠を基にギリシャ・ローマ世界よりも——そして彼は明言しないが、聖書の想定よりも——遙かに古い歴史を主張していたと述べる⁸⁵。これは、どんな奇怪な説でも思いつく人間の理性の乱脈ぶりを指弾するものではあるが、それと同時に、世界の時間的な拮据りについて「我々」が有する先入見を動揺させようとするものでもある。1588年の「馬車について」の章ではさらに進んで、ゴマラに拠りながらメキシコの宇宙論を取り上げる⁸⁶。それによると、太陽が減びるたびに人類は死滅を繰り返し、現在は五つ目の太陽である。天空の落下によって第二の太陽が減んだ時には巨人族が減び——スペイン人たちもその遺骨を見たという⁸⁷——、第四の太陽が暴風で減んだ際には当時の人類は猿に変わってしまったという

⁸⁵ *Ibid.*, p. 607. これはアウグスティヌスが『神の国』(XII, 10-11)で反駁した諸説を引くものだが、モンテーニュは反駁の部分には立ち入らない。モンテーニュは「馬車について」の章の1588年以降の加筆でも、エジプトの神官がソロンに語った太古の歴史の記録に言及し、これは「斥けるべき証言ではないと思われる」と述べる(*Les Essais*, éd. citée, p. 951)。

⁸⁶ *Histoire générale des Indes occidentales*, éd. citée, f. 158 r^o-v^o. モンテーニュは触れないが、ゴマラによると、以前の太陽の時代の出来事は絵画文字の資料によって伝えられている。また、宣教師たちは、第五の太陽の出現後に新たな神々が生まれたという彼らの信条を、宣教のために大いに活用したという(*Ibid.*, f. 159 r^o)。

⁸⁷ 「レーモン・スボン弁護」の章でも巨人の存在に言及があった(*Les Essais*, éd. citée, p. 609)。これはキリスト教世界においても珍しい考えではない。例えば『神の国』XIV, 9 参照。

（モンテーニュはこれについて、「人間の軽信はどんな印象でも受け入れてしまう⁸⁸」と評する）。そして現在の世界はどうか。

この第四の太陽の死後、世界は二十五年の間、ずっと闇の中にあった。十五年目に一人の男と一人の女が創られ、彼らが人類を再興した。さらに十年後のある日、新たに創られた太陽が現れた。そして彼らの暦年はこの日から始められた。太陽の創造の三日後、古い神々が死んだ。新しい神々はそれから日を逐って生まれた。この最後の太陽がどのように滅びると彼らが考えているのか、私の著者 [=ゴマラ] は何も教えてくれない。だが、この第四の変化について彼らの示す年代は、かの天体の大会合と符合する。これは、天文学者たちの考えによれば八百余年前にあったもので、様々な重大な変化や革新を生み出した⁸⁹。

天体の影響や終末論的な世界の破局を論じるのは『エッセー』の中では稀有なことであり、モンテーニュは必ずしもこれらを真に受けているわけではない。だが、天文学者たちの説との一致を指摘したり、メキシコ人たちが「我々と同じように」世界の終末の接近を信じていると言ったりするなど⁹⁰、この宇宙論と「我々」との符合を強調することで、彼はこれを現実の諸要素から人間が構築しうる一つの世界観として提示するのである。ここではますます、「我々」には知りえない、失われた歴史が穿つ空白の大きさが強調される。「我々」が辛うじて知りえた一つの大陸において、現在用いられている暦以前の世界があり、現在とは異なる種族の人間によって何らかの歴史が営まれていたかもしれないとしても、我々はそれについて何も知ることはできないのである。

結局のところ、古典古代の事象にせよ新大陸の事象にせよ、僅かに残存する断片的な知識によって語らざるをえない以上、いずれも人間の歴史の一部を伝える貴重な残存物としてそのままに受け入れる必要がある。そしてこのような姿勢は同時に、我々の許に届いた知識、とりわけ第三者の証言を介した間接的な知識について、新しい捉え方を要請することになる。

可能なことの探求

この問題を考える上で重要な一節が「想像の力について」の章の末尾にある。この章は世界地誌を扱うものではないが、一見奇異に見える事例に関す

⁸⁸ *Les Essais*, éd. citée, p. 959.

⁸⁹ *Ibid.* ゴマラによれば、1552年時点において、第五の太陽の出現を起点とした計算で858年目であるという。なお、ゴマラは惑星の大会合には言及しない。

⁹⁰ *Ibid.*

る証言をいかに扱うべきかを問い、またそれを歴史記述——冒頭で述べたように、これは世界地誌と密接に繋がる——と結びつける点、他者の証言に依存する知識について新たな見方を提起するものである。1580年の段階でこの章は、他者から借りた事例に「人の言うには à ce qu'on dit」と言い添えたことについて、「私が拝借する話 (Histoires) については取ってきた相手の良心に委ねる⁹¹⁾」と説明して終わっていた。これに対し、1588年の加筆は以下の通りである：

考察は私に属し、それは経験の吟味でなく理性の吟味によって成り立つ。誰も
が自分の事例を結びつけることができる。何も事例を持っていないものも、出
来事の膨大さと多様さに鑑みて、十分なものを持っていると思ってよい⁹²⁾。

この章のいくつかの逸話は実際、人が「経験によって *par experience*」知っていることとされ⁹³⁾、1588年以降の加筆では、まさにこの引用部が推奨するように、モンテーニュが個人的に知った事例が付加される。ここで彼は、提示された事例について、信憑性の議論は脇に置いて、「経験の吟味でなく理性の吟味」によって考察するという。無論、この「理性」は決して無謬でも普遍的でもなく、あらゆる題材に対して恣意的かつ無定見に働きうるものである。1588年以降の加筆にあるように、「私の自由はあまりに自由で、私は自分で良いと思って、そして理性に従って、不正で罰すべき判断を表明するかもしれない⁹⁴⁾」のである。

上の引用部に続く1588年以降の加筆で、モンテーニュはさらに大きな一歩を踏み出す。他者から借りる証言について、その危うさを自覚しつつも、敢えて非常に開かれた態度を取るのである。

我々の風習や運動についての私の研究で、虚構の証言は、それが可能なものである限り、真実のものと同様に役に立つ。起こったことでもそうでなくても、パリでもローマでも、ジャンでもピエールでも、それは常に人間の能力のなすことであり、そうした話は私を大いに啓発してくれる。私はそれを見て、影からも実体からも等しく利益を得る。そして、話がしばしば様々な読み方を持つので、私はそれらの中から最も稀有で銘記すべきものを用いる。ある種の著者

⁹¹⁾ *Ibid.*, p. 108.

⁹²⁾ *Ibid.*

⁹³⁾ 不能のまじないである「結び目」について (*Ibid.*, p. 101) ; 女が身籠った子供に想像上の性質を移すことについて (*Ibid.*, p. 108) 。

⁹⁴⁾ *Ibid.*, p. 109 (強調引用者) 。

たちは、出来事について語ることを目指す。私が目指すのは、もしなしうるなら、起こりうることについて語ることである⁹⁵。

モンテーニュはここで、おそらくアリストテレス『詩学』九章の歴史と詩の区分に由来する「可能なこと」という概念を導入して、個々の証言の真偽や信憑性の問題を完全に宙吊りにする。この点、出来事を「事例」として捉えようとする、1588年以降の「習慣について」の章の加筆部や「馬車について」の章での議論と平仄が合う。彼の目指すのは、真偽も定かならぬ曖昧な領域にまで踏み込みながら、「人間の能力」の極限を探求することである。これに対してあくまで「真実」や「実体」に拘泥するのは、元々極めて限られている自分の知識をさらに狭めるものでしかない。

「可能なもの」という概念が導入されると並行して、証言の伝達とその信憑性の保証について、「良心」をめぐる問題がさらに深められる。1580年には他者の良心への信頼について述べていたが、これに加えて1588年以降の加筆では『エッセー』の読者に向けて、彼自身の良心を強調するのである。すなわち彼は、類例を勝手に拵えることを固く自らに禁じる点において自分が「どんな歴史家の信憑性をも凌駕している」と述べ、さらに次のように言う。

私が読んだり聞いたり行ったり言ったりしたことから取る事例について、どんな些細な細部も改変しないよう自分を戒めている。私の良心はイオターフ偽造しない。私の知識は分からない⁹⁶。

第三者に由来する事例にしても（「読んだり聞いたり」）、自分自身に関する事例にしても（「行ったり言ったり」）、自分の思考の枠組を揺るがしうような啓発的な事例は、その枠組の外部から齎されるものでなければならない。その際、語る者の「良心」と、受け取る者がそれに寄せる信頼こそが、この伝達を可能ならしめる唯一の基盤となる。モンテーニュは、歴史記述の問題に即して、こうした知識のあり方をさらに突き詰めていく。人間の歴史は、民衆の思いなしや噂に依拠し、他人の内心を測らなければならないゆえ、常に不確実なものたらざるをえない⁹⁷。また、世間で言う歴史家は――

⁹⁵ *Ibid.*, p. 108.

⁹⁶ *Ibid.*, pp. 108-109.

⁹⁷ *Ibid.*, p. 109. それゆえモンテーニュは、「精妙で正確な良心と賢慮を備えた」「神学者や哲学者」たちを歴史記述から排除する。神学者・哲学者と歴史家との対置は、「話し合う方法について」の章でタキトゥスを論じる際にも現れる（*Ibid.*, p. 988）。元々はボダンの考える「人間の歴史」・「自然の歴史」・「神の歴史」という三分

まさに「食人種について」の章で言う「賢い人々」のように——、一定の知識に基づいてこれを整理し、相応しい文体と構成を与えるものとされる⁹⁸。モンテーニュは自分で様々な事例を扱うにあたり、こうしたやり方を拒絶する。人間の歴史の不確かさを前提とした上で、「可能なこと」と目しうる証言の一切を、予め何の選択も判断も潤色も加えずに受け入れるのである。いわば、「食人種について」の章で新大陸帰りの下男について述べる際に「真正の証言」の唯一の条件としていた「単純粗野」で「忠実」なあり方を、ここでは知識の伝播の全ての段階へと一般化し、かつ自分自身でも引き受けようとするのである。

無論これは、単に経験的知識を蒐集して記述すれば事足りるということではない。それらを伝えられたままに受け入れた上で、いかに自らの判断を揮うのが最重要の問題となる。モンテーニュは章末でプルタルコスの言葉として「もし自分の事例が真実のものだったら、それは他人の功績である。もしそれが後世に役立ち、我々に美德を明かしてくれるようなものであるなら、それは自分の功績である⁹⁹」と述べるが、まさにこれは彼自身の志すものでもあった。「話し合う方法について」の章の言葉を借りれば、「経験を数えるだけでは十分ではない。それを計量し、按配しなければならない。それを消化し蒸溜した上で、経験の持つ理由や結論を引き出さなければならない¹⁰⁰」のである。こうした事例を基にして、「我々の風習や運動についての研究」を推進し、人間に関する知識を絶えず拡大し、更新することが必要である。

法を承けるものである (*Méthode de l'histoire*, éd. citée, p. 114 b)。

⁹⁸ モンテーニュ自身は、この能力を欠くという口実で、同時代史を書くよう慫慂した人々を謝絶する (*Les Essais*, éd. citée, p. 109)。

⁹⁹ *Ibid.*

¹⁰⁰ 「話し合う方法について」の章では、議論において話者の勿体ぶった態度や服装や地位や財産などが「しばしば空虚で愚劣な言葉に信用を与える」と語るが、そうした人々は普通の会話に立ち混じる時でも「彼らの経験の権威 (*autorité de leur expérience*) であなたを圧倒する」と言う (*Ibid.*, p. 945)。かくして「私が聞いた、私が見た、私が行った、とあなたは事例に押し潰される。[...] もし旅行や官職が彼らを改良したというなら、彼らの判断力の所産においてこそ、それを見せてもらいたいものだ。経験を数えるだけでは十分ではない、それを計量し、按配しなければならない。それを消化し蒸溜した上で、経験の持つ理由や結論を引き出さなければならない。今日ほど多くの歴史家がいたことはない。それを聞くのは常に良いことで、また有益だ。彼らは素晴らしい教えに満ちており、彼らの記憶の宝蔵は褒められるべきもののなだから。その大部分は、確かに人生の役に立つ。だが、我々が今求めているのはそれではない。我々が求めるのは、これらの叙述家 (*recitateurs*) や蒐集家 (*recueilleurs*) が本人自身、褒められるべきものであるかだ」 (*Ibid.*, p. 946 ; 強調引用者)。

そして、彼自身も自他の事例を与えられたままに誠実に提示すると保証することで、モンテーニュは同様の考察を『エッセー』の読者にも促すのである。

結論

モンテーニュが他者の証言を受け入れるか否かを自らに問うた際に自覚的に選ぶ態度を考える上で、パスカルの用いた「信じやすい」という形容詞はいみじくも肯綮に中っている。人間の知識、とりわけ第三者の証言を介する知識の不確実さを乗り越えるため、彼は敢えて「信じやすい」態度を取ることで、人間のあり方についての探求の幅を可能な限り広げようとしたのである。これによって、真実にあくまで執するならば手元から零れ落ちていくであろう様々な事例を、自在に考究することができるようになる。

世界地誌的な知識はこの端的な例であった。新大陸について具体的に取上げた章では、証言の吟味と真実の追求が次第に後景に退く一方、出来事を「事例」として捉えて自らの論の中で自由に選択し、活用するようになっていた。それは一つには、自分自身について正しく判断し、また理性の行き過ぎを抑制するといった目的のために、世界の広大さと多様性に関する経験的知識を援用するからである。こうした知識は不断に更新され、既存の知識の枠組を絶えず動揺させうるものとされていた。また一つには、特に 1588 年以降、人間と世界について我々の知りえない広漠たる領域が広がっていることを自覚するにつけ、我々の手許に残された僅かばかりの知識をさらに狭める恐れのある真実の「究明」に替えて「可能なもの」の全てを受け入れることを標榜し、同時に、個々の証言の信憑性を厳密に吟味する代わりに証人の「良心」への信頼と自らの「良心」の堅持とを、このような不確実さの中で人間についての知識を成り立たせうる基盤として前面に出すことになるからである。こうした点からすると、「レーモン・スポン弁護」の章で「……を信じるならば」という条件を設けて「頭のない人間」その他の怪物的な種族について語ったことは、人間のあり方の可能性を、「人間の歴史」の不確実性の中で問おうとする限界事例を示しているのである。